

活用体系の地理的変異と記述の枠組み

小西いずみ

1. はじめに

この報告書の目的は、動詞等の活用における日本語諸方言のバリエーションと、それを記述するための枠組みを提示することである。記述の枠組みについては、この活用編だけでなく、『全国方言文法辞典』全体に適用しうる語・形態素の認定基準やそれらの分類法を目指している。『全国方言文法辞典』である以上、方言間の文法の差異を超えて適用しうる枠組み、言わば、通方言的な記述法を用意する必要があり、この点で、特定の方言の共時的な参照文法を編むのとは異なる。また、『全国方言文法辞典』の読者・使用者には、方言・言語の研究者だけでなく、広く方言に関心のある人が想定ないし期待される。そうである以上、高度に専門的な言語学・日本語学の知識を要せずとも理解・使用できるような記述法を目指す必要がある。今回の報告書作成に至るまで、各方言の活用の記述を行いながら、全体方針と用語を検討し、再度、各方言の活用形に適用するといったことを繰り返した。ここで提示するのは、述語の構造をどのように分析し、文法形式を抽出・ラベルづけるかについての、現段階での方針である¹。

2. 「活用」と「活用形」

「活用」は、狭義には「単語が統語的機能や文法的意味に応じて形を変えること」などと定義できるが、ここでは、形の変化の単位を「単語」ではなく「述語」に拡大する。「活用」と「活用形」は次のように規定できる²。

活用 述語が統語的機能や文法的意味に応じて形を変えること。語彙的意味を担う単語それ自体が語形変化をする場合のほか、単語に他の語（付属語や補助用言）が接続する場合を含む。

活用形 一つの語彙的意味と、一つ以上の文法的意味を表し、自立する形。

なお、「語（単語）」の種類として、「名詞」「動詞」等の品詞分類の上位に、次の区別を置く。

自立語 単独で自立しうる最小の形式。名詞・動詞・形容詞などの品詞が含まれる。共通語では名詞「ヤマ（山）」、「ガクセー（学生）」、動詞「カク（書く）」、「ミル（見る）」、形容詞「アカイ（赤い）」、「ナイ（無い）」など。

付属語 単独では自立して用いにくい、自立形式に付いて、文中での統語的機能・文法的意味を示す語。語形変化のない「助詞」と語形変化のある「助動詞」に分けられる。共通語では、「ヤマ（山）ガ」の「ガ」、「ヤマダ。」の「ダ」、「カク（書）ダロー。」の「ダ」

1 述語の構造が主対象であったため、「助詞」にあたるものの下位分類や、学校文法における「接続詞」「感動詞」にあたるものの認定基準については、未検討である。

2 ここでの「活用形」は、本書所収の小柳論の「動詞活用形の捉え方」の二つのうち、(6)に相当するか、さらに広い。風間(1992)、宮岡(2002)、丹羽・他(2012)の「用言複合体」という概念とほぼ重なるだろう。

ロー」など。

「付属語」は、伝統的な国語学や口語学校文法におけるそれよりも狭く、複数の品詞やテンス(時制)にわたる自立形式に付くことを必要条件とする。例えば、動詞「書く」の否定の形「カカナイ」の「ナイ」は、非自立形式「カカ」に付くため、「付属語」ではなく、語を構成する文法的な形態素「接辞」(この場合、語彙的要素に後接するため「接尾辞」)とみなす。一方、推量を表す「カクダロー」「カイトダロー」「カカナイダロー」「アカイダロー」等の「ダロー」は、テンスや肯否において相互に対立する自立形式「カク」「カイト」「カカナイ」に後接し、動詞と形容詞という異なる品詞にわたっても使われる。この「ダロー」は「付属語」である³。また、「書イテイル」の「イル」や、「赤クナイ」の「ナイ」は、自立語の「補助用言」としての用法とみなす。多義語である動詞「イル」や形容詞「ナイ」の別義の一つとして、語彙的意味が稀薄で、述語句内で文法的意味を表すものがあると認めることになる。

語彙的意味を担う要素の品詞別に述語の種類を列举すると、次のとおりである。

動詞 共通語の「カク(書)」「ミル(見)」など。

形容詞 共通語の「アカイ(赤)」「ナイ(無)」など。

形容名詞述語 共通語の「シズカ(静)ダ」「キレー(綺麗)ダ」など。学校文法における形容動詞の語幹に相当する形式を「形容名詞」とする。

名詞述語 共通語の「ヤマ(山)ダ」「ガクセー(学生)ダ」など。

動詞・形容詞は、どの方言においても、それ自体が語形変化(狭義の活用)をするが、一部の文法的意味を表すために、付属語など別語を付加させる。名詞はそれ自体が語形変化するわけではなく、後接する助動詞(共通語では「ダ」、いわゆる「断定の助動詞」「コピュラ」)が述語としての文法的意味の分化を助ける。ここでは「シズカ」「キレー」も「形容名詞」という品詞の一語とみなし、「シズカダ」「キレーダ」を形容名詞に助動詞が付いた「形容名詞述語」とする。ただし、後述のとおり「形容名詞述語」は、方言によっては形容詞に準ずる活用形を発達させているなど、その品詞上の位置づけが方言によって異なる可能性がある(4.4 参照)。

本報告書の「要地方言の活用体系記述」(以下「要地方言」)では、原則として、動詞は「書く」「見る」「来る」「する」、形容詞は「見る」、形容名詞述語は「静かだ」、名詞述語は「学生だ」で代表させた。

3. 活用形の種類

各述語の活用形を、次の3つのタイプに大別する。[]内は略称。

終止するタイプ[終止類] それ自体で述語として文を終止する形。

接続するタイプ[接続類] 連体・連用修飾の節・句をつくる形。

派生語をつくるタイプ[派生類] もとの語・述語句に文法的意味を付し、活用する述語句、または、他の品詞に属する語を新たに派生する形。

³ ここでの「接辞」と「付属語」の区別は、服部(1960)の「付属形式」と「付属語」の区別や、宮岡(2002)の「接辞(affix)」と「椅辞(clitic)」の区別に準ずる。

「要地方言」において共通に記述する活用形として、次のものを設定した⁴。[†]は動詞のみ、^{††}は動詞以外の形。

終止類

断定非過去形 共通語の「字を書く。」「実が赤い。」「部屋が静かだ。」「私は学生だ。」など。特定の文法的意味を担わない、平叙文・主節述語の無標形。学校文法における動詞単独の「終止形」に相当。

断定過去形 「字を書いた。」「実が赤かった。」「部屋が静かだった。」「私は学生だった。」など。テンスにおいて過去を表す点で、断定非過去形と対立する形。

なお、断定非過去形と断定過去形とを合わせて「断定形」とする。

命令形[†] 「手紙を{書け / 書きな(よ)}」など。命令文(聞き手に対して行為を要求する文)で用いる形。「書け。」「見ろ。」など、学校文法の「命令形」に対応する形のほか、「書きな(よ)」「見な(よ)」など、くだけた場面で使われる 以外の形も含める。

禁止形[†] 「汚い字を書くな。」「外を見るな。」など。聞き手に対して行為を禁止する形。上の命令形と行為の要求/禁止という点で対立。命令形の に対応する形があれば、それも記す。

意志形[†] 「一人で手紙を書こう。」「今からテレビを見よう。」など。話し手の意志を表す形。

推量形 「太郎が手紙を書くだろう。」「今ごろ実が赤いだろう。」「向こうは静かだろう。」「太郎は学生だろう。」など。事態に対する話し手の判断としての推量を表す形。解説では 推量の派生義としての 確認要求(「あなたが手紙を書くだろう?」など)に触れる場合がある。

接続類

連体非過去形 「字を書く人」「赤い実」「静かな部屋」「今も学生である友達」など。連体修飾節・句を作る形。

連体過去形 「字を書いた人」「昨日は赤かった実」「静かだった部屋」「去年まで学生だった友達」など。テンスにおいて過去を表す点で、連体非過去形と対立する形。

なお、連体非過去形と連体過去形とを合わせて「連体形」とする。

中止形 「花子が文を{書き / 書いて} 太郎が絵を書いた。」「この紙は{赤く / 赤くて} あの紙は白い。」「この部屋は静かで、あの部屋はうるさい。」「太郎は学生で、花子は会社員だ。」など。当該節の事態と主節の事態とが並列・対比される、または継起的な関係を持つ場合に使われる形。

仮定形 「今から手紙を書けば、間に合う。」「もし実が赤ければ、採ろう。」「周りが静かなら、眠れる。」「太郎が学生なら、頼めない。」など、当該節で仮定を提示し、主節で帰結を述べる文で主に用いられる形⁵。

派生類

否定形 「手紙を書かない。」「実が赤くない。」「部屋が静かじゃない。」「私は学生じゃない。」など。否定を表す点で単純な断定非過去形と対立する形。

なる形^{††} 「実が赤くなる。」「静かになる。」「学生になる。」など、変化動詞「なる」を付す形。

⁴ 記述すべき活用形の検討の際、原案として日本語記述文法研究会(2010)の活用表を参照した。

⁵ 共通語の「手紙を{書く/書いた}なら、知らせて。」の「~なら」のような、テンスの分化を可能にする形は、仮定に対する帰結を述べる文で主に用いられる形式でない限り、含めない。

丁寧形 「私が手紙を書きます。」「もう実は赤いです。」「この部屋は静かです。」「私は学生です。」
など。聞き手に対する丁寧な待遇を表す形。

受身形[†] 「花子が太郎に蹴られる。」「転んだところを太郎に見られる。」など。動作による影響の受け手を主語にした受身文での形。

可能形[†] 「難しい漢字を書ける。」「その作品は駅前の映画館で{見られる/見れる}。」など。動作・変化が可能であることを表す形。可能肯定形と可能否定形とで形が違う場合、表では欄を分けて記述。動作を可能(否定形では不可能)にする条件による 能力可能 状況可能 等の区別がある場合は、解説する。

尊敬形[†] 「先生が手紙を{書かれる/お書きになる}。」など。主語に対する上位待遇を表す形。

継続形[†] 「太郎が手紙を書いている。」「金魚が死んでいる。」など。動作・変化が進行中であること、あるいは、達成された動作・変化の結果状態が継続して存在していることを表す形。
進行 と 結果継続 の区別がある場合は、解説本文中に記す。

希望形[†] 「ペンで書きたい。」など。動作の達成を主体自身が希望することを表す形。

のだ形 「万年筆ある? 先生に手紙を書くんだ(よ)。」「太郎には頼めないよ。まだ学生なんだ。」
など。事態を既に定まったこととして述べる形。典型的には別の事態の事情・背景・理由などを述べる場合に用いられる⁶。

ほかに、各方言において特徴的な活用形、および、後述する「基幹」の認定に必要な活用形を、該当する類の欄に追加する。「要地方言」の解説では、派生述語句の活用についても、分かる限り記述している。

共通語における活用表を、表1に示す。

4. 活用形の構造

活用形の構造を記述するにあたり、ここでは、動詞・形容詞・形容名詞述語・名詞述語の全てにわたって次の方針をとる。

- (1) 特定の方言の特定の述語が、一つの活成型(活用の種類)に属すとするのではなく、一つ以上の活成型が相補的に組み合わせさせて全活用形を揃える、という考え方をとる。
- (2) モーラ(拍)を音韻単位とした活用形の構造記述を行い、カタカナで表記する。

(1)は、例えば、共通語を含めた多くの方言の動詞「見る」は、母音語幹{mi}(ミ)の形と、子音語幹{mir}(ミ+ラ行子音)による形とがあるとするものである。これは、1節で述べた「通方言的な記述法」の要点である。(2)は、1節で述べた、多様な読者・使用者層を想定しての方針である。

⁶ 他の活用形が統語的機能と文法的意味に即して規定されるのに対し、「のだ形」は、述語を何らかの手段(準体助詞や連体形)で名詞化し、新たに述語を作るという形態・統語的な条件も含意しており、やや性格が異なる。「のだ形」を活用形の一つに含めたのは、もともとは、名詞述語において共通語やいくつかの方言で「のだ形」に限り連体非過去形に相当する「～ナ」の形が現れるのを確認するためであった。

表1 共通語の活用表

《動詞》

活用形		類別	a類 書く	b類 見る	来る	する
終止類	断定非過去		カク	ミル	クル	スル
	断定過去		カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令		カケ カキナ	ミロ ミナ	コイ キナ	シロ シナ
	禁止		カクナ	ミルナ	クルナ	スルナ
	意志		カコー	ミヨー	コヨー	シヨー
	推量		カクダロー	ミルダロー	クルダロー	スルダロー
接続類	連体非過去		カク	ミル	クル	スル
	連体過去		カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止		カキ カITE	ミ ミテ	キ キテ	シ シテ
	仮定		カケバ カイタラ	ミレバ ミタラ	クレバ キタラ	スレバ シタラ
派生類	否定		カカナイ	ミナイ	コナイ	シナイ
	丁寧		カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役		カカセル	ミサセル	コサセル	サセル
	受身		カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能		カケル	ミラレル ミレル	コラレル コレル	《デキル》
	尊敬		カカレル オカキニナル	ミラレル 《ゴランニナル》	コラレル 《イラッサル》	サレル 《ナサル》
	継続		カITEイル カITEル	ミTEイル ミTEル	キTEイル キTEル	シTEイル シTEル
	希望		カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ		カクノダ カクンダ	ミルノダ ミルンダ	クルノダ クルンダ	スルノダ スルンダ

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生(だ)
終止類	断定非過去	アカイ	シズカダ	学生ダ
	断定過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
	推量	アカイダロー アカカロー	シズカダロー	学生ダロー
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ	《学生ノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカダッタ	学生ダッタ
	中止	アカク アカクテ	シズカデ	学生デ
	仮定	アカケレバ	シズカナラ	学生ナラ
派生類	否定	アカクナイ	シズカデワナイ シズカジャナイ	学生デワナイ 学生ジャナイ
	なる	アカクナル	シズカニナル	学生ニナル
	丁寧	アカイデス	シズカデス	学生デス
	のだ	アカイノダ アカインダ	シズカナノダ シズカナンダ	学校ノダ 学生ナンダ

《 》 異なる語による代替形
稀な形

4.1 動詞

4.1.1 「活用型」と「類」

動詞の活用型として次の2種をたてる。

型 … 子音語幹・母音交替型。

型 … 母音語幹型。

特定の方言の、特定の動詞の活用は、次のいずれかで記述する。

) 1種類の 型語幹

) 複数の 型ないし 型語幹の相補的組み合わせ

共通語の場合、) は「書く」などいわゆる「五段動詞」に、) は「見る」など「一段動詞」や「来る」「する」に適用できる。なお、上から分かるように「語幹」は、音素を音韻単位として抽出する、活用形の不変化部分である。例えば「書く」は、{kak}という1種類の 型 k 語幹(力行子音で終わる語幹。以下同様)を持ち、b類「見る」は、 型語幹{mi}と、 型 r 語幹{mir}とを併存させると捉える。各方言の各動詞がどれか一つの活用型(活用の種類)に属すとするのではなく、複数の語幹系列が相補的に全活用形を揃えたと考える。

また、方言間の比較・対照のために動詞の語彙を「類」に分ける⁷。大きく a・b の2類と「来る」「する」の2語に分け、a類・b類はさらにそれぞれ3つに下位区分される。以下のとおり。

a類

「書く」類 「出す」「立つ」「飲む」「飛ぶ」など。古典語の四段活用動詞。

「居る」類 「ある」など。古典語のラ行変格活用動詞。

「死ぬ」類 「去ぬ」。古典語のナ行変格活用動詞。

b類

「見る」類 「着る」など。古典語の上二段活用動詞。

「起きる」類 「飽きる」など。古典語の上二段活用動詞。

「開ける」類 「寝る」「受ける」など。古典語の下二段活用動詞。

「来る」… 古典語の力行変格活用動詞。

「する」… 古典語のサ行変格活用動詞。

⁷ 大西(1996a)の「活用の類」の概念を引き継ぐもの。ここで、「四(五)段」「上一段動詞」「上二段動詞」など、伝統的な国文法・学校文法における活用の種類の名称を使わないのは、この名称が、活用の形態的特徴と、所属語彙とを、同時に表してしまうためである。つまり、「四(五)段動詞」という名称は、「書か」「書き」…など四(五)種の母音交替が見られることと、「書く」「出す」「立つ」などの動詞群とを同時に意味し、「上一段動詞」という名称は、母音交替が見られず「ミ(見)」などイ段に固定されることと、「見る」「着る」などの動詞群とを同時に意味する。中央語史においては、古典語から現代共通語まで、この両義性があまり問題にならないが、母音変化を経た琉球諸方言では、動詞活用における母音交替のありかたと語彙類とが一致しない。また、本土方言においても、現代共通語の「五段」にあたる語彙において、必ずしも母音五段が揃わない場合や、「一段」にあたる語彙において母音がイ段に限らない場合が。4.1.3 および5.2節も参照。

「要地方言」では、各方言に関して、少なくとも a・b 類各 1 語と「来る」「する」の活用形を記述する。a 類・b 類については、原則、それぞれ「書く」「見る」で代表させるが、依拠する資料やその方言の特徴（それらの動詞が不規則な活用をするなど）により、他の動詞を用いる。a・b 類の下位類は、当該方言で区別がある場合のみ記す。

現代共通語では、類と活用型・語幹が次のように対応する⁸。

a 類（五段）「書く」	型 k {kak}
b 類（一段）「見る」	型 i {mi}、型 r {mir}
「来る」（力変）	型 k {k}、型 r {kur}{kor}
「する」（サ変）	型 s {s}、型 r {sur}{sir}

中古語では、類と活用型・語幹が次のように対応する。

a1（四段）「書く」	型 k {kak}
a2（ラ変）「居り」	型 r {or}
a3（ナ変）「死ぬ」	型 n {sin}、型 r {sinur}
b1（上一）「見る」	型 i {mi}、型 r {mir}
b2（下二）「開く」	型 k {ak}、型 r {akur}
「来」（力変）	型 k {k}、型 r {kur}{kor}
「す」（サ変）	型 s {s}、型 r {sur}{ser}

現代共通語の「来る」「する」、中古語の a3・b2 と「来」「す」には、短い型語幹と長い型語幹があり、{...C} 対 {...CVr} と対応する⁹。b 類の型語幹 {...C i/e} も、型語幹 {...C}（「見る」なら {m}）の語幹末母音が i または e に安定したものと捉え直すことができる¹⁰。

沖縄県那覇市首里方言については、型の語幹についてより複雑な記述枠組みが必要となる。これについては次項で「基幹」と合わせて述べる。

4.1.2 「基幹」の設定、活用形の構造記述

モーラ（拍）を音韻単位として活用形の構造を記述するために、「基幹」という単位を設ける¹¹。基幹はおおよそ学校文法の「語幹 + 語尾」に相当する。基幹と語幹の基本的な関係は、次のとおり。

⁸ 現代共通語における型の語幹末子音には、k（力行）g（ガ行）s（サ行）t/c（タ行）n（ナ行）m（マ行）b（バ行）r（ラ行）w/φ（ワ・ア行）があり、型の語幹末母音には、i（イ段）と、e（エ段）があることになる。型については後述の「a 類動詞の基幹音便形」において語幹末子音の一覧を示したことになるが、型の語幹末母音については明示していない。

⁹ 中山(1993)の動詞活用記述法は、強変化動詞（四段型）を無標、弱変化（一・二段型）を有標、ただし弱変化動詞において「寝ル」「寝レバ」などラ行が現れる形は「無標活用形」とした上で、動詞を横、活用形を縦に配置した二次元活用表において、有標な形が右上になるよう動詞・活用形を配列する。中山の無標/有標活用形の区別が、本稿の語幹系列 {...CVr}/{...C}{...Ci/e} の区別に対応すると言える。

¹⁰ 二段動詞について、「出づ」に{id}と{ide}または{idu}の二つの語幹をたてるという立場がある（大木 2010 がこの可能性を検討し、結論としては破棄する）が、本発表は{id}と{idur}{ider}をたてるもので、これとは異なる。本文で述べるように、二段だけでなく他の変格動詞、さらに一段動詞も通じて、{...C(i/e)} と {...CVr} の二つをたてるのが、日本語の変異と変化を捉えるうえで意味があると考えている。

¹¹ 「基幹」は、子音語幹後に「連結母音」等を置く立場と親和性がある（屋名池 1987、清瀬 1989、丹羽 2012 など）。本報告書の小柳論からも示唆されるように、古典語と現代語の通史的な記述にも有効である。

型活用 基幹 = 「語幹 + 母音」、または、その音便（子音や母音の脱落）形

例)「カカナイ」の「カカ」kak・a、過去形「カイト」の「カイ」kai

型活用 基幹 = 語幹

例)「ミナイ」の「ミ」mi

共通語および本土諸方言では、型活用の基幹として「ア段形」「イ段形」「ウ段形」「エ段形」「オ段形」および「音便形」が想定できる。動詞の基幹「音便形」は、「イ段形」に由来し、中止の接辞「テ」や過去の「タ」に接続する際の形に限定する。型では、ほかに、拗音、つまり「語幹 + 半子音 y + 母音」の基幹がありうる。例えば、富山市方言などの「書く」の仮定形「カキヤ」は、基幹「拗音ア段形」となる。型活用の基幹は「イ段」(学校文法の上一段動詞の場合)か「エ段」(同じく下一段動詞の場合)となるが、特に必要のない限り、まとめて「基幹」とのみ表す。

なお、「要地方言」では、a類動詞の基幹音便形の作り方の規則を動詞活用表のあとに表示している。表2に共通語の例を示す。

表2 共通語におけるa類動詞の基幹音便形

語幹末 子音	語例	活用形例 (過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das・u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	tをQ(促音)にする。
w/φ	買う ka(w)・u	カッ-タ	wをQ(促音)にする。

共通語の、活用形の構造の記述例を表3に示す。「要地方言」では音素表記は基本的に用いず、表音的カタカナによるモーラ単位の記述とする。資料の「要地方言の活用対照表」(以下「対照表」)では、表3のように音素単位の分析とモーラ単位の分析を併記する。なお、派生類においては、派生した述語句に新たに語幹・基幹を認定できるが、表ではその境界表示を省略している。

資料「対照表」では、各動詞の基幹ア～オ段形・音便形の一覧を示した。これは、b類動詞や「来る」「する」が型(子音語幹・母音交替型)の活用形をどれだけ充実させているかを測る簡便な指標となる。例えば表4に示すように、共通語と福岡市方言の「見る」の基幹を対照すると、福岡市方言は型 r{mir} のイ段基幹 mir・i (ミリ) を備えている。

表3 共通語における動詞活用形の構造

語例	活用型 { 語幹 }	基幹	活用形の記述例
書く	型 k {kak}	kak・a, i, u, e, o (ア・イ・ウ・エ・オ段) kai (音便)	断定非過去 kak・u (ウ段) 推量 kak・u=daroR (断定非過去=ダロー) 過去 kai-ta (音便-タ) 否定 kak・a-nai (ア段-ナイ) 可能 kak・e-ru (エ段-ル)
見る	型 {mi}	mi (イ段)	否定 mi-nai (基幹-ナイ)
	型 r {mir}	mir・a, u, e, o (ア・ウ・エ・オ段)	断定非過去 mir・u (ウ段) 命令 mir・o (オ段) 可能 mir・e-ru (エ段-ル)
来る	型 k {k}	k・i, o (イ・オ段)	過去 k・i-ta (イ段-タ) 否定 k・o-nai (オ段-ナイ)
	型 r {kur}	kur・u, e (ウ・エ段)	基本 kur・u (ウ段)
	{kor}	kor・a, e (ア・エ段)	受身 kor・a-reru (ア段-レル) 可能 kor・e-ru (エ段-ル)
する	型 s {s}	s・a, i (ア・イ段)	否定 s・i-nai (イ段-ナイ) 受身 s・a-reru (ア段-レル)
	型 r {sur}	sur・u, e (ウ・エ段)	断定非過去 sur・u (ウ段)
	{sir}	sir・o (オ段)	仮定 sur・e-ba (エ段-バ) 命令 sir・o (オ段)

- ・ 語幹末子音と母音の境界
- 接辞の開始境界
- = 語の開始境界

表4 共通語(左)・福岡県福岡市方言(右)における「見る」の基幹

活用型	II型	I型 r
語幹	mi	mir
ア段	×	mir・a(ミラ)
イ段	mi(ミ)	×
ウ段	×	mir・u(ミル)
エ段	×	mir・e(ミレ)
オ段	×	mir・o(ミロ)
音便	×	×

活用型	II型	I型 r
語幹	mi	mir
ア段	×	mir・a(ミラ)
イ段	mi(ミ)	mir・i(ミリ)
ウ段	×	mir・u(ミル)
エ段	×	mir・e(ミレ)
オ段	×	mir・o(ミロ)
音便	×	×

その方言の母音ないしモーラ体系によって、可能な基幹は異なる。東北方言では、サ・ザ・タ行のイ・ウ段、つまり「シノス」「ジノズ」「チノツ」それぞれが音韻的に対立しない。本報告書の岩手県盛岡市方言と秋田県由利本荘市本荘方言では、「する」の短い語幹{s}において基幹イ・ウ段が統合した「イウ段」をたてた。例えば断定非過去形における岩手の「ス」、秋田の「シ」の基幹が「イウ段」となる。

また、沖縄県宮古島市平良下里方言では、その母音体系に則り、基幹を「ア段」「イ段」「イウ(ĩ)段」「ウ段」としている(表5)。「ア段」「イ段」「イウ段」「ウ段」は、それぞれ中央語の「ア段」(未然)「イ・エ段」(連用・已然・a類の命令・b類の未然)「ウ・イ段」(連体・連用)「オ段」

(b類の命令)におおよそ歴史的に対応する。例えば「書く」の断定非過去形・連体非過去形は「カキウ」kak・i(イウ段)となる。同じ形が「居る」では「ウイウ」uĩ、「見る」では「ミーウ」miRĩとなり、ラ行イウ段 r・i が i となる音韻(または形態音韻)規則があると見られることから、型 r の語幹系列においては、i 単独拍で終わる形を「イウ段」と認めた。また、断定過去形・連体過去形が、「書く」では「カキウタイウ」kak・i-taĩ(イウ段-タイウ)なのに対し、「居る」では「ウタイウ」u-taĩ と、基幹の末尾拍が脱落した形をとる。この末尾拍脱落形を基幹「尾略」形とした。

表5 沖縄県宮古島市平良下里方言における「書く」「居る」「見る」の基幹

		a1類 書く	a2類 居る	b類 見る	
活用型		I 型 k	I 型 r	II 型	I 型 r
語幹		kak	ur	miR	miRr
基幹	ア段	kak・a(カカ)	ur・a(ウラ)	×	miRr・a(ミラ)
	イ段	kak・i(カキ)	ur・i(ウリ)	miR(ミー)	miRr・i(ミリ)
	イウ段	kak・ĩ(カキウ)	uĩ(ウイウ) < ur・ĩ	×	miRĩ(ミリウ) < miRr・ĩ
	ウ段	×	×	×	miRr・u(ミル)
	尾略	×	u(ウ)	×	×

沖縄県首里方言では、b類動詞の a類動詞への統合が進んでおり、型は不要である。一方で、学校文法の連用形(型イ段・型基幹)に存在動詞「居り」や「接辞テ+補助動詞」が後接する形の縮約が進んだ状態を呈すことから、多くの先行研究に準じ、一つの型語幹が「基本語幹」「連用語幹」「音便語幹」のセットで構成されるとする。「持つ」では、基本語幹・連用語幹・音便語幹がそれぞれ{mut}{muc}{muQc}となる(これを {mut/muc/muQc} のように表すことがある)。また、基幹は、母音体系により、「ア段」「イ段」「ウ段」「エ段長音」「オ段長音」となる(表6)。例えば「持つ」の非過去断定形は「ムチュン」muc・u-N(連用語幹ウ段-ン)意志形は「ムタ」mut・a(基本語幹ア段)となる。基本語幹の「ア段」「イ段」「ウ段」「エ段長音」はそれぞれ中央語の「ア段」(未然)「エ段」(已然・命令)「ウ段」(終止・連体)「エ段」(已然・命令)+別形式」におおよそ対応する。連用語幹の「イ段」、音便語幹の「イ段」が、それぞれ中央語の「連用形」「連用形-テ」に対応し、他の段はそれらに存在動詞などの別形式が付いたものに由来する。

表6 沖縄県那覇市首里方言における「持つ」の基幹

		a類 持つ		
活用型		I 型 t		
語幹の種類 語幹		基本語幹 mut	連用語幹 muc	音便語幹 muQc
基幹	ア段	mut・a(ムタ)	muc・a(ムチャ)	muQc・a(ムツチャ)
	イ段	mut・i(ムティ)	muc・i(ムチ)	muQc・i(ムツチ)
	ウ段	mut・u(ムトウ)	muc・u(ムチュ)	×
	エ段長	mut・eR(ムテー)	×	muQc・eR(ムツチエー)
	オ段長	×	×	muQc・oR(ムツチヨー)

4.1.3 動詞活用の変異・変化の記述

これまで指摘されてきた動詞活用体系（動詞相互の活用形構造の範列的關係）の変異・変化は、本記述法では 以下のように表現される。

(A) ラ変動詞のラ行五段化

「居る」類において、イ段形・ウ段形の出現環境が、「書く」類と一致する。

(B) ナ変動詞のナ行五段化

「死ぬ」類において、{...nur}系列を喪失、{...n}系列の出現環境が「書く」類と一致する。

(C) 二段動詞の一段化

b類において、{...C}系列の基幹末母音と{...CVr}系列の母音Vが、i または e に収束する。

(D) 一段動詞のラ行五段化

b類において、{...CVr}系列の母音Vが一つに収束、その出現環境がa類と一致する。

(E) カ変動詞の上一段化

「来る」において、{k}系列の基幹末母音と{kVr}系列の母音Vが、i に収束する。

(F) サ変動詞のサ行五段化

「する」において、{s}系列の出現環境が、a類と一致する。

(G) サ変動詞の上一または下一段化

「する」において、{s}系列の基幹末母音と{sVr}系列の母音Vが、i または e に収束する。

中央語の歴史上では、「終止連体の合一」により(A)が起こり、その後、(B)(C)も起こることによって、活用の類の区別が現代共通語と同様となる（本書の小柳論参照）。現代諸方言では、方言によって(D)～(G)の変化が中央語より進んでいることが知られている。総じて 活用体系の単純化 という一般性の高い動機に支えられて、変化が進んでいると言える。ただし、上の諸変化の適用順序に方言差があることも知られている¹²。

本報告書「要地方言」で対象とした方言のうち、沖縄県宮古島市平良下里方言では、(A)の変化が起こっておらず、「居る」類と「書く」類との区別が保たれている。

山口県東周防方言では、(B)の変化が起こっておらず、「死ぬ」類と「書く」類との区別が保たれている。

(C)は今回対象とした方言では全て起っているが、周知のとおり、九州の一部や和歌山県では「二段活用」が残存している。例えば、大分県豊後高田市方言の「開ける」では、次のように、短い語幹{ak}の基幹末母音、長い語幹{akVr}の語幹内母音に、u、e、iが見られる¹³。

¹² 現代方言における動詞活用体系の変異・変化に関しては小林(2004)が総合的な整理・考察をしている。また、活用の類の統合という観点からは大西(1996)の論がある。最近のものでは黒木(2012)が厳密さを志向した記述枠組みにおける方言間の対照を行っている。

¹³ 大西(1996)ほか、糸井(1983)、国立国語研究所(1991、1993)、彦坂(2001)などを参照。

過去形	アケタ ak・e-ta
命令形	アキー ak・iR
断定形	アクル akur・u
受身形・可能形	アケラルル aker・a-ruru

(D)の変化は、各地で独立に起こっていることが知られている。すでに、4.1.2の表4において、福岡市方言では共通語よりも、「見る」の型 {mir}系列の基幹が充足しているを見た。ほかに「要地方言」では、岩手、秋田、富山で共通語より(D)の変化が進んでいることが分かる。なお、沖縄県首里方言では、音韻変化や、「連用形-居り」の断定・連体非過去形化も伴って、b類動詞のa類動詞への統合が進んでいる¹⁴。

また、b類動詞のa類動詞への近似・統合は、必ずしも型r化によってのみ進められるわけではない。「要地方言」のうち、山梨県甲府市方言では、仮定形と命令形とで、同じ基幹を用いるという平準化が進んでいる。

命令形	カケ kak・e (工段)	ミロ mir・o (オ段)
仮定形	カケバ kak・e-ba (工段-バ)	ミロバ mir・o-ba (オ段-バ)

岐阜県岐阜市方言では、拗音ア段、あるいは、基幹に「ヤ(ー)」が続く形が、複数の活用形にわたって現れる。下では「書く」「見る」のみあげるが、「来る」「する」も同様。

命令形	カキヤー kak・yaR (拗ア段)	ミヤー mi-yaR (イ段-ヤー)
禁止形	カキヤースナ kak・yaR-su-na (拗ア段)	ミヤースナ mi-yaR-su-na (イ段)
仮定形	カキヤ kak・ya (拗ア段)	ミヤ mi-ya (イ段-ヤ)
尊敬形	カキヤース kak・yaR-su (拗ア段長-ス)	ミヤース mi-yaRsu (イ段-ヤース)

(E)の変化は、関東方言など主に東日本で進んでいることが知られている。「要地方言」では、山梨県甲府市方言の意志形「キズ」k・i-zu が該当する。ほか、例えば、群馬県方言では次のように、意志形のほか否定形でも{k}系列イ段の形が用いられる¹⁵。

意志形	キベー k・i-beR
否定形	キネー k・i-neR

(F)の変化は、「要地方言」の中では、岩手・秋田や沖縄県首里方言で進んでいる。ほかに島根県

¹⁴ もともとa類動詞でも語幹末がr(ラ行)の動詞は多いが、(D)の変化や、首里の存在動詞をとりこんだことによるr語幹系列の形が増えることによって、ますます型rが動詞の無標活用型という側面が強くなる。小柳(2011)は、上代語の上一段動詞に現れる連体・終止・已然のラ行語尾について、ラ行が語頭に現れないという音配列上の特性も考慮した上で、「語尾としての一般性」を持つものとした。言い換えれば「rは、その語が動詞であり、かつ、その位置が語幹末であるという品詞・形態境界標識となる」ということである。r語幹形の増大という変化は、その標識機能が適用される動詞を拡張させること、さらに翻って、その標識機能が再強化されることを意味する。一方、語幹末子音rの語の同定性の保障という機能上の負担は減り、rより前の語幹部分がその機能を担うようになることを意味する。

¹⁵ 杉村(1984)、国立国語研究所(1991、1993)などを参照。

出雲方言などでも進んでいることが知られている¹⁶。秋田方言では次のように、元の{sir}系列の形とともに、{s}系列の形が併存している。

断定形	シル	sir・u	シ	s・i
意志形	シロー	sir・oR	ソー	s・o(R)

(G)については、「要地方言」のなかでは、山口県東周防方言に見られる。この方言では、母音を e を使った、{s}系列の基幹工段形と{ser}系列の形が充実している。例をあげる（他の併存する形は省略）。

断定形	セル	ser・u
過去形	セタ	s・e-ta
命令形	セロ	ser・o
	セー	s・eR

4.2 形容詞

形容詞の活用型として次の2種をたてる。特定の方言の特定の形容詞の活用は、これらの相補的な組み合わせにより記述する。

非動詞型活用 下の形以外。

動詞型活用 語幹に、型 r 動詞（学校文法のラ変・ラ行五段動詞）に準じる活用型の接辞が続く。本土諸表現の場合、伝統的国語学で「カリ活用」と呼ばれてきたもの。

動詞型活用では、その型 r の接辞に語幹・基幹を想定することができる。本土諸方言の場合、語幹は{kar}、基幹は動詞と同じ「ア段」「イ段」「ウ段」「エ段」「オ段」「音便」形のほか、末尾のラ行拍が脱落した「尾略」形を認める。九州方言に現れる「アカ-カ」等がこの尾略形にあたる。琉球諸方言においては母音段の基幹は動詞に準じる。

共通語「赤い」の活用形の記述例を下に示す。

非動詞型	断定非過去	アカイ	aka-i（語幹-イ）
	中止	アカク	aka-ku（語幹-ク）
		アカクテ	aka-ku-te（語幹-ク-テ）
	否定	アカクナイ	aka-ku=nai（語幹-ク=ナイ）
動詞型	断定過去	アカカッタ	aka-kaQ-ta（語幹-音便-タ）
	推量	アカカロー	aka-kar・oR（語幹-オ段長音）

資料「対照表」では、動詞と同様に、動詞型活用の基幹が一覧できるようにした。共通語では動

¹⁶ 友定(2008)などを参照。

詞型基幹として才段「-カロ」-kar・o と、音便「カツ」-kaQ しか認められないが、福岡県福岡市方言では、表 7 のように、動詞型活用の基幹が充実していることが分かる。

表 7 福岡県福岡市方言における「赤い」の動詞型基幹

語幹・語		aka(アカ) 交替語幹 ako(アコ)
活用型		動詞型
動詞型語幹		aka-kar
基 幹	ア段	aka-kar・a(アカカラ)
	イ段	×
	ウ段	×
	エ段	aka-kar・e(アカカレ)
	オ段	aka-kar・o(アカカロ)
	音便	aka-kaQ(アカカツ)
	尾略	aka-ka(アカカ)

東北方言では、語幹が断定非過去形・連体非過去形として自立して用いられる¹⁷。秋田県由利本荘市本荘方言の記述例を下に示す。

非動詞型	断定非過去	アケア	ake(語幹)
	中止	アケアクテ	ake-ku-te(語幹-ク-テ)
動詞型	断定過去	アケアカッタ	ake-kaQ-ta(語幹-音便-タ)

また、西日本の多くの方言では、「アコナイ」「アコーナイ」など、学校文法の「連用形」に由来する形で語幹末母音が交替する(いわゆる「ウ音便」)。その場合、語幹末母音が交替した部分を「交替語幹」とする。例えば、山口県東周防方言では、下に例示するように、語幹末母音が a、i、e のときに交替語幹が現れる。「要地方言」では、交替語幹が現れる環境(語幹末母音の種類や活用形)についてできるだけ解説を加えた。

「赤い」	断定非過去	アカイ	aka-i(語幹-イ)
	中止	アコーテ	akoR-te(交替語幹長音-テ)
「大きい」	断定非過去	オーキー	oRkiR < oRki-i(語幹-イ)
	中止	オーキューテ	oRkyuR-te(交替語幹長音-テ)
「いびせー」	断定非過去	イビセー	ibiseR < ibise-i(語幹-イ)
	中止	イビソーテ	ibisoR-te(交替語幹長音-テ)

沖縄県那覇市首里方言では、動詞型活用として「語幹-サ=存在動詞アリ」に由来する、いわゆる「サアリ活用」の形が現る。基幹は表 8 のとおり。例えば、断定非過去形は「アカサン」aka-saŋ

¹⁷ 大西(1997)参照。通時的には断定非過去・連体非過去形における語幹末母音と接辞 i の母音連続が融合し、それが語幹化したものである。語幹それ自体を一つの活用形とするのは、レベルの異なる単位を混同しているという批判がありえよう。その立場からは、断定非過去・連体非過去形を「語幹-φ(ゼロ接辞)」とすべきであるが、煩雑さ・分かりにくさを避けるため「語幹」としている。

(語幹-動詞型撥音便)¹⁸、連体非過去形は「アカサル」aka-sar・u(語幹-動詞型ウ段)となる。

表 8 沖縄県那覇市首里方言における「赤い」の動詞型基幹

語幹・語	aka(アカ)
活用型	動詞型
動詞型語幹	aka-sar
基幹	
ア段	aka-sar・a(アカサラ)
イ段	aka-sar・i(アカサリ)
ウ段	aka-sar・u(アカサル)
エ段長音	aka-sar・eR(アカサレー)
オ段長音	×
音便	aka-sai(アカサイ)[イ音便] aka-saN(アカサン)[撥音便]
尾略	aka-sa(アカサ)

4.3 名詞述語

名詞述語は、前述のとおり、どの方言でも名詞自体は語形変化せず、付属語が後接して、述語句としての文法的意味を表す。名詞述語の活用型は、形容詞と同じく「非動詞型」と「動詞型」に分けられる。定義も「語幹」が「名詞」、「接辞」が「助動詞」に替わるほかは同様である。

非動詞型活用 下の形以外。

動詞型活用 名詞に、型 r 動詞(学校文法のラ変・ラ行五段動詞)に準じる活用型の助動詞が続く。

動詞型活用で現れる助動詞は、学校文法の「断定の助動詞」にあたる。ただし「にてあり」「であり」に由来する語幹{dar}(方言によっては{de=ar}{zyar}{yar})と、「にあり」「なり」に由来する語幹{nar}とが併存すると考える。基幹は、形容詞同様で、本土諸方言の場合「ア段」「イ段」「ウ段」「エ段」「オ段」「音便」「尾略」となる。琉球諸方言も形容詞に準じる。

共通語における名詞述語「学生だ」の記述例を示す。

非動詞型	中止	学生デ	gakuseR=de(名詞=デ)
動詞型	断定非過去	学生ダ	gakuseR=da(名詞=動詞型{dar}尾略)
	推量	学生ダロー	gakuseR=dar・oR(名詞=動詞型{dar}オ段長音)
	仮定	学生ナラ	gakuseR=nar・a(名詞=動詞型{nar}ア段)

4.4 形容名詞述語

形容名詞述語は、共通語ではほぼ名詞述語に準じた活用をするが、西日本方言においては形容詞に準じるなど、方言差がある。本報告書で対象とした方言や先行研究を見る限り、少なくとも次の

¹⁸ ここでは基幹「音便形」の原則に反し、ウ段形由来の音便形を認めている。

タイプが見いだせる¹⁹。

名詞述語型 形容名詞が、名詞述語における名詞に準じる。

形容詞型 形容名詞が、形容詞語幹に準じる。

ナ付加・名詞述語型 「形容名詞=ナ」形が、名詞述語における名詞に準じる。

ナ付加・形容詞型 「形容名詞=ナ」形が、形容詞語幹に準じる。

上の四つそれぞれにおいて、さらに非動詞型・動詞型に分類される。

共通語では「名詞述語型」のみが見られる。

名詞述語型 + 非動詞型	中止	シズカデ	sizuka=de (形容名詞=デ)
名詞述語型 + 動詞型	断定非過去	シズカダ	sizuka=da (形容名詞=尾略)
	推量	シズカダロー	sizuka=dar・oR (形容名詞=オ段長音)

「要地方言」の福岡県福岡市方言の「ヘタ(下手)」では「名詞述語型」と「形容詞型」が併存している。共時的には、形容名詞「ヘタ」と形容詞「ヘタカ」が併存していると捉えるべきかもしれない。形容詞型のとりやすさは語によって異なり、「シズカ」では名詞述語型が主となる。

名詞述語型 + 非動詞型	中止	ヘタデ	heta=de (形容名詞=デ)
名詞述語型 + 動詞型	断定非過去	ヘタヤ	heta=ya (形容名詞=尾略)
	推量	ヘタヤロー	heta=yar・oR (形容名詞=オ段長音)
形容詞型 + 非動詞型	中止	ヘタクテ	heta-ku-te (形容名詞=ク=テ)
形容詞型 + 動詞型	断定非過去	ヘタカ	heta-ka (形容名詞=尾略)
	推量	ヘタカロー	heta-kar・oR (形容名詞=オ段長音)

山口県東周防方言では「名詞述語型」と「ナ付加・名詞述語型」が併存している。

名詞述語型 + 非動詞型	中止	シズカデ	sizuka=de (形容名詞=デ)
名詞述語型 + 動詞型	断定非過去	シズカ(ジャ)	sizuka(=zya)(形容名詞(=尾略))
	推量	シズカジャロー	sizuka=zyar・oR (形容名詞=オ段長音)
ナ付加・名詞述語型 + 非動詞型	中止	シズカナデ	sizuka=na=de (形容名詞=ナ=デ)
ナ付加・名詞述語型 + 動詞型	断定非過去	シズカナ(ジャ)	sizuka=na(=zya)(形容名詞=ナ(=尾略))
	推量	シズカナジャロー	sizuka=na=zyar・oR (形容名詞=オ段長音)

「要地方言」の中には「ナ付加・形容詞型」が見られないが、富山県朝日町笹川方言では、次のように動詞型の場合に「名詞述語型」と「ナ付加・形容詞型」が併存する。中国地方など西日本の

¹⁹ 大西(1997)を参照。

一部にも見られることが知られている²⁰。

名詞述語型 + 動詞型 過去 シズカジャッタ sizuka=zyaQ-ta (形容名詞=音便-タ)
 推量 シズカジャロ(ー) sizuka=zyar·o(R) (形容名詞=オ段(長音))
 ナ付加・形容詞型 + 非動詞型
 過去 シズカナカッタ suzuka=na=kaQ-ta (形容名詞=ナ=音便-タ)
 推量 シズカナカロ(ー) sizuka=na=kar·o(R) (形容名詞=ナ=オ段(長音))

5. 記述枠組みの問題点

5.1 「基幹」という単位、および、接辞・付属語の抽出

4.1.2 の表3に示したように、本辞典の記述枠組みでは、基幹に続く要素を文法的接尾辞として抽出している。ただ、そうすると、例えば共通語の可能形「カケル」「ミレル」は「基幹工段形-ル」と分析され、可能の意を担う接辞が「ル」ruとして抽出されることになる。これは、多くの話者の直観に反しよう。つまり、この記述枠組みでは、基幹が語彙的意味を表示し、ルが可能の意を担うと捉えることができず、「基幹工段形-ル」全体で、動詞の語彙的意味と可能の意とが総合的に表されているとみなすことになる。学校文法において、五段動詞の可能形が活用表に位置づけられず、「可能動詞」と位置付けるのと同様の問題である。

上の問題は、「基幹」という単位を設けることに伴うもので、音素単位で分析すれば -eru を可能を担う接辞とみなせるように思われる。しかし、京都市方言や大阪府方言における否定形で、基幹がイ段の場合にのみ「ミーヒン」など「ヒン」が現れることは、音素単位かモーラ単位かという問題とは関わらない。「ヒン」の出現環境は、順行同化という音声学的動機に支えられた形態音韻規則として記述可能だが、語幹ないし基幹が語彙的意味を表示し、接辞が文法的意味を担うという分析的な見方ではなく、総合的な見方をとるべき例と言える。

ほかに、基幹から切り出された部分をどのように分析し、接辞と付属語・補助用言等に分類するかという問題がある。2節に記したように、複数のテンス・品詞にわたる形に付く要素は付属語と認定しているが、今回の「要地方言」の記述からは必ずしもその情報が得られない場合がある。例えば、岩手や秋田の状況可能形で現れる「～ニイー」「～(ニ)エー」を、一つの接辞とみなすのか、「ニ」と「イー」「エー」をそれぞれ付属語とみなすのかなどは、「要地方言」の記述内容だけでは判断できない。

5.2 動詞における活用型と語幹のたてかた

動詞の活用形の記述枠組みでは、一つの動詞において複数の語幹を設定する場合、「見る」において{mi}と{mir}をたてるなど、長い方の語幹を全て 型 r (語幹末がラ行子音) だとした。これは、4.1.3 で見た(D)の変化、すなわち「一段動詞のラ行五段化」が多くの方言で独立して起こっており、この流れを中心に、動詞活用体系の単純化が進んでいることを仮説的前提としたためである。しかし、本報告書の小柳論にも見られるように、例えば、「見る」の意志形「ミヨー」や使役形「ミサス」において、{miy}や{mis}という語幹(「ミヨ」や「ミサ」という基幹)と設定することも理論的には可能である。

²⁰ 小西(2001)、国立国語研究所(1991、1993)、大西(1997)参照。

「要地方言」を見ている、{...r}型以外の語幹の設定が機能すると思われる例がある。例えば、京都府京都市方言では、「見る」「来る」「する」の短い基幹「ミ」「キ」「シ」等にヤ行が続く形が複数あり²¹、次のように{...y}語幹系列を立てれば、a類「書く」との平準化が進んでいるという把握が可能である。

意志形	カコー kak・oR	ミヨー miy・oR	シヨー siy・oR
否定形	カカヘン kak・a-heN	ミヤヘン miy・a-heN	シヤヘン siy・a-heN
尊敬形	カカハル kak・a-haru	ミヤハル miy・a-haru	シヤハル siy・a-haru
使役形	カカス kak・a-su	(ミサス)	シヤス siy・a-su

「要地方言」の対象ではないが、八丈方言では、「見る」に{mi}と{mir}のほか、{mit}をたてることにより、a類との平準的な関係が捉えられる形がある²²。

断定過去	カカラ kak・a-ra	ミトラ mit・a-ra
連体過去	カコー kak・oR	ミトー mit・oR

また、5.1で述べた問題とも関わるが、大阪府方言のb類動詞では「メーヘン」という「エ段形-ヘン」が現れる。つまり、大阪府方言における「見る」の活用型は、厳密には 型{mi}と 型{mir}ではなく、 型{m}と 型{mir}と捉えられる。

参考文献

- 系井寛一(1983)「大分県の方言」『講座方言学 9 九州地方の方言』国書刊行会
- 大木一夫(2010)「古代日本語動詞の活用体系—古代日本語動詞形態論・試論—」『東北大学文学研究科研究年報』59号
- 大西拓一郎(1996a)「活用の類と統合—全国方言の活用の通時的対応のモデル—」言語学林 1995-1996 編集委員会(編)『言語学林 1995-1996』三省堂
- 大西拓一郎(1996b)「大分県豊後高田市大分方言の動詞の活用」『日本語研究諸領域の視点 上巻』明治書院
- 大西拓一郎(1997)「活用の整合化—方言における形容詞の「無活用」化、形容動詞のダナ活用の交替などをめぐる問題」加藤正信編『日本語の歴史地理構造』明治書院
- 金田章宏(2001)『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
- 風間伸次郎(1992)「接尾辞型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」宮岡伯人編『北の言語 類型と歴史』三省堂
- 黒木邦彦(2012)「二段動詞の一段化と一段動詞の五段化」丹羽・他(2012)所収
- 国立国語研究所編(1991)『方言文法全国地図 第2集』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編(1993)『方言文法全国地図 第3集』大蔵省印刷局
- 小西いずみ(2001)「富山県笹川方言における形容動詞述語形式—名詞述語と異なる「～ナ」「～

²¹ 「要地方言」の松丸の記述によれば、使役の「-ヤス」は「-ラス」由来とのこと。

²² 八丈方言の活用については、金田(2001)の記述を参照。

- ナカッタ」等を中心にー」『国語学』52 巻 3 号
- 小林 隆(2004)「動詞活用 of 歴史」『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
- 小柳智一(2011)「上代の動詞未然形ー制度形成としての文法化ー」『万葉語文研究 第 6 集』和泉書院
- 杉村孝夫(1984)「群馬県の方言」『講座方言学 5 関東地方の方言』国書刊行会
- 坪井美樹(2007)『日本語活用体系の変遷』増訂版、笠間書院
- 友定賢治(2008)『島根県のことば』明治書院
- 中山昌久(1993)「動詞活用語形における成層性などー中山の方式への解説」『同(つづき)』『国文学解釈と鑑賞』58 巻 1 号、7 号
- 日本語記述文法研究会(2010)『現代日本語文法 1 第 1 部総論 第 2 部形態論』くろしお出版
- 丹羽一彌・黒木邦彦・田村建一・品川大輔(2012)『日本語はどのような膠着語かー用言複合体の研究』笠間書院
- 丹羽一彌(2012)「日本語の連辞的語構成」丹羽・他(2012)所収
- 服部四郎(1960)「付属語と付属形式」『言語学の方法』岩波書店
- 彦坂佳宣(2001)「九州における活用型統合の模様とその経緯ー『方言文法全国地図』九州地域の解釈ー」『日本語科学 9』国書刊行会
- 宮岡伯人(2002)『「語」とは何か エスキモー語から日本語を見る』三省堂
- 屋名池誠(1987)「活用ー現代東京方言述部の形態 = 構文論的記述〔2〕ー」『学苑』565 号